

巻頭言

「情報共有」



日本赤十字社臨床検査技師会

副会長 池田 紀男（日本赤十字社和歌山医療センター）

会員の皆様には、日々の業務や学術活動などに益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。また、平素より日本赤十字社臨床検査技師会（赤臨技）の諸事業に格別のご支援とご協力を賜っておりますことに、心より厚く御礼申し上げます。

三浦前々会長（大阪）、油野前会長（金沢）の下、4年間学術部を経験後、副会長の重責を拝命させていただき、早1年を経過しようとしています。まだまだ力不足ではございますが、会員相互の橋渡しとなれるように一層の努力を重ねてまいりますので、何卒よろしく願いいたします。

さて、現在、平成28年度診療報酬改定が議論されている最中ですが、次回改定も医療機関にとっては非常に厳しい状況になることが予想されます。それは医療費が40兆円を超え、社会保障費が国家予算の30%を超えている現状があるためです。特に地方では人口の減少に伴い、入院患者数の減少および入院患者の高齢化という壁にぶち当たっており、病床数、病院機能がその地域でどうあるべきかを予測し、戦略を立てなければなりません。病院の各職種すべてが現状を把握し、自施設の未来を考えていくべき時です。

このような医療情勢のなかで、検査部門だけの発展は望めません。これからはチーム医療が中心となり、そのなかで臨床検査技師には何ができるのか、何が求められているのかが重要になってきます。このため、赤臨技では年一回開催している業務研修会にお

いて、「活力ある検査室創り」や「BCP（事業継続計画）」などをテーマに取り上げ、チーム医療について参加者全員で考える機会を作っています。また、本年6月開催予定の業務研修会では、「臨床検査からの提言—今、なにができるのか—」と題して、検体採取や検査説明など、検査業務拡大の取り組みをシンポジウム形式で企画中です。ただし、やはり基本である学術的な裏付けがすべてにおいて重要であることに変わりはなく、研究発表にもより力を入れ、両立を目指しているところであります。

もうひとつ、私が特に重要と位置付けているものがあります。それは、「情報共有」です。毎年、すべての施設に検査集計調査（部門別人数配分や使用機器など）およびアンケート調査（2交代制の導入、出血時間検査実施の有無など）の協力をお願いしています。そのアンケート結果を数値だけでフィードバックするのではなく、グラフや表を使い、実際に活用しやすいかたちで発信することを目指しています。全国の92病院と情報共有をすることで、まずは現状を知ることができます。次の段階では、自施設の強みと弱みが鮮明になり、取り組むべき課題がみえてくる可能性があります。今後も、私たちが知りたい情報を適時アンケート収集し、情報発信・共有していくつもりです。そして、横のつながりを今以上に強固なものにしたいと考えております。

末筆ではありますが、会員皆様の益々のご健勝とご多幸を心からお祈りいたしますとともに、本会を介し、会員相互の交流がより活発となりますことを願い、皆様の積極的な赤臨技活動への参画とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



追伸：各種学会に参加したとき、「あっ！日赤？私も日赤」というだけで、連帯感や親近感を感じ、すぐに打ち解けた経験はありませんか。赤臨技主催の学術大会や研修会は他の学会と比べ、非常にアットホームな雰囲気です。施設の枠を越え、広く相談し合える仲間は今後の財産です。どんどん参加し、ドンドン増やしてほしいと願います。